

第十九回

芭蕉の道俳句大会

大会プログラム

令和二年五月十六日(土)
じゅうろくプラザ・ホール

応募句

入選作品集

新型コロナウイルス感染拡大防止のため
当日の大会行事は中止

公益社団法人俳人協会

岐阜県支部・主催

第十九回芭蕉の道俳句大会

入賞作品

応募句の部

岐阜県知事賞

校門に白息どつと駆け込めり

鳥沢 尚子

(山県市)

俳人協会賞

仕舞風呂家族の数の柚子浮かび

杉山 千歳

(北方町)

岐阜県議会議長賞

石鹼は昭和の香り春の星

森 瑞穂

(神戸町)

岐阜県支部賞

鮒釣つて返して春の一日かな

大野 公子

(山県市)

岐阜県教育委員会賞

春芝居子役はひよいと担がれて

武藤 勇

(岐阜市)

岐阜市長賞

たれもかも免罪符めくマスクかな

清水 雅子

(各務原市)

秀逸賞

雛段の一番前は紙のひな

加納 碩恵

竿二段背のびしながら大根干す

横井 美圭

盗られさうな羅漢がひとつ山眠る

蒔田多佳子

わが影と同行二人青き踏む

石井 雅之

竹百幹鳴る春愁の風の中

木村 品子

銅鐸の流水文や初蝶来

太田眞佐子

仏壇のほとけくすぐり煤払ふ

伊藤ふみ子

マスクしてみな同じ顔始発駅

大西 誠一

花ミモザ海へ向かひて異人館

高木 純子

岐阜市議会議長賞

風車まはる誰かがゐるやうに

中島 瑞枝

(岐阜市)

岐阜市教育委員会賞

足跡のはなびらめきて春渚

水上れんげ

(岐阜市)

岐阜観光コンベンション協会賞

ゆるやかに匂ふ点滴日脚伸ぶ

尾関 逸子

(大垣市)

各選者入選句(ゴチック特選)

☆ 井越 芳子 選

【類句があるため一句削除】
 足跡のはなびらめきて春渚
 校門に白息どつと駆け込めり
 初雪の闇をぬらして消えにけり
 集落の明かりが洩れる白障子
 やはらかき雨の夕べや土筆煮る
 指櫛にたよりなき髪春来る
 身の反りを力に凧の糸を引く
 装蹄のととのふ駿馬風光る
 城の鯨鉾春満月を撥ね上ぐる
 三河万歳烏帽子大きく傾ぎけり
 能書きの一つ増えをり鮫鱧鍋
 箱書は父の筆なり大旦那
 煤逃げの集まってをる床屋かな
 探梅や山のくぼみに日の移り
 獲物得て放鷹の脚鈴鳴らす
 仏壇のほとけくすぐり煤払ふ
 常夜灯もう点されて雪ぼたる
 福豆を七輪で煎る氏子かな
 やはらかに背中うごきぬ若菜摘
 剪定の脚立の上で空褒める
 キューピーの臍見当たらず春サラダ
 雪霏霏と油断しし美濃驚かす
 たちまちに過ぎし一日山桜
 なづな咲く洗札名の子の寢墓
 たれもかも免罪符めくマスクかな
 井戸蓋の竹青々と初雀
 大寒や月皓々と静かなり

水上れんげ
 鳥沢 尚子
 長田美智子
 島戸勢津子
 塚本富士子
 名和 永山
 塚山 勝英
 田中 紫香
 足達紀代子
 吉川 璋子
 上野ひさよ
 林 照子
 早野 仁策
 鈴木ミヨコ
 飯田 正幸
 伊藤ふみ子
 藍川 陽子
 宮本 英洋
 島津 忠弘
 原 百合子
 大成平八郎
 堀江 美州
 宮本ます美
 中川キヌヨ
 清水 雅子
 左高 宣子
 渡辺 久子

☆ 今津 大天 選

初鏡母がいるかと思ひけり
 路線バスの地図さながらに蠅の道
 盗られさうな羅漢がひとつ山眠る
 賀状受く友の筆くせなつかしく
 日だまりは母のふところ冬うらら
 新春や嫁ぎたる子に妻の顔
 いつの間知らぬどうしの焚火の輪
 紅顔も髭面となり卒業す
 ゆるやかに匂ふ点滴日脚伸ぶ
 石鱈は昭和の香りを春の星
 浅蜷焼く女将ときをり海を見て
 解体の跡のぬかるみ凍返る
 ありがとうのことば交はして卒業す
 梅林に定まる空の青さかな
 小さき手の硬貨はみだすお年玉
 徘徊の夫に似合ひし春帽子
 【類句があるため一句削除】
 仏壇のほとけくすぐり煤払ふ
 揚雲雀どれも天心疑はず
 わが影と同行二人青き踏む
 神木にふれて音聞く明の春
 スマホより飛び出す孫の御慶かな
 春芝居子役はひよいと担がれて
 彫りてまだ仏とならず春の昼
 なづな咲く洗札名の子の寢墓
 初釜や亭主自作の楽茶碗
 節分や我家の鬼は角隠す
 どんと焼片目達磨に睨まれて

桑原 悦子
 辻 佐代子
 蔭田 多佳子
 杉山 多美
 長田美智子
 横井たつ子
 佐藤すみ子
 伊藤 英司
 尾関 逸子
 森 瑞穂
 吉川 璋子
 左高 富美
 村井 田鶴
 曲直瀬 弘子
 傍島 隆
 中山 あや子
 伊藤ふみ子
 水上れんげ
 石井 雅之
 佐藤 直子
 上野 徳次郎
 武藤 勇
 藍川 陽子
 中川キヌヨ
 杉山 保子
 篠田 一郎
 左高 宣子

各 選 者 入 選 句 (ゴチック特選)

☆ 大野 鶴士 選

わが影と同行二人青き踏む
 仮の世のほか世を知らず蜃気楼
 風車まはる誰かがゐるやうに
 犬鷲の舞ふ宙といふ檻のなか
 翼なき身をひるがへし梯子乗り
 マスクしてみな同じ顔始発駅
 小春日や鯉は四角に口を開け
 灰となるまで見届けて札納
 靱殻の中の記憶や寒卵
 石鱈は昭和の香り春の星
 深海の塩一撮み七日粥
 与太者のやうに先ゆく哇火かな
 真夜なれば膝崩さうぞ女雛殿
 水脈消ゆるところ番のかいつぶり
 涅槃像寄らば寢息の聞えさう
 一茶忌の海風に松ねじれをり
 こめかみの力のゆるび梅日和
 満願の太鼓響くや魚は氷に
 ホットレモン旅の高ぶり残しつつ
 春芝居子役はひよいと担がれて
 椿落つ遊女の墓に仮名二文字
 思ひ出し思ひ出しては山笑ふ
 一画を大きく撥ねて初硯
 揚雲雀焦土見し日のはるかなり
 鳴き砂を踏むともなしに実朝忌
 銅鐸の流水文や初蝶来
 たれもかも免罪符めくマスクかな
 メビウスの環たる世界や春の風邪

石井 雅之
 宇佐見俊二
 中島 瑞枝
 山田多賀男
 長田美智子
 大西 誠一
 小串 宏子
 大岩 里子
 傍島 節子
 森 瑞穂
 多和田瑠璃
 小林 研
 広井 幹雄
 村瀬 幹枝
 岩田 恵子
 牧 富子
 伊藤ふみ子
 川上久美子
 片桐 栄子
 武藤 勇
 宇佐見俊二
 関谷 恭子
 小島美智子
 松川 正樹
 船田恵津子
 太田眞佐子
 清水 雅子
 芦川藤雨子

☆ 荻原 正三 選

ゆるやかに匂ふ点滴日脚伸ぶ
 雛段の一番前は紙のひな
 問診の長き町医者あたたかし
 仕舞風呂家族の数の柚子浮かび
 雛納め箱に昭和と筆の文字
 【類句があるため一句削除】
 一年の暮らしのメモや古曆
 春の土昭和の遊び遠くなる
 石鱈は昭和の香り春の星
 白椿咲きつくすとは錆びること
 静けさやぽとりと落つる紅椿
 風光る空へと放つ竹とんぼ
 桜鯛尾緒へさはに化粧塩
 竿三段背のびしながら大根干す
 鮎釣つて返して春の一日かな
 年の暮今も年貢と言ひし人
 観覧車われ冬晴の空の中
 桶樽を転がし洗ふ寒の水
 【類句があるため一句削除】
 校門に白息どつと駆け込めり
 こゑ続かかぎり上昇告天子
 獅子舞の雄々しや尾には尾の動き
 春近し大吉と出る水みくじ
 冬桜薄日に色をなくしけり
 花ミモザ海へ向かひて異人館
 受験日の家族揃つて送り出す
 草萌に歩幅大きくなりけり
 枝先のつぼみに雫しだれ梅

尾関 逸子
 加納 碩恵
 高橋 喬子
 杉山 千歳
 横井 たつ子
 日比 昌子
 竹嶋 富美子
 森 瑞穂
 左高 富美
 富田 好子
 竹内 すま子
 曲直瀬 弘子
 横井 美圭
 大野 公子
 近藤 はる
 後藤 千づる
 牧 富子
 鳥沢 尚子
 梅枝 あゆみ
 向畑 あさひ
 中島 正紘
 堀江 美州
 高木 純子
 大野 正子
 上野 みどり
 左高 宣子

各選者入選句（ゴチック特選）

☆ 小鳥 幸男 選

銅鐸の流水文や初蝶来たれもかも免罪符めくマスクかな
 【二重投句のため一句削除】
 予報士の雪のマークを置く故郷引鶴の光になりに行く途中茅葺きや縄すり抜ける干大根
 【類句があるため一句削除】
 雛段の一番前は紙のひな口止めをされほろ苦き蔀の薑桜鯛尾鰭へさはに化粧塩舵切つて揺らぐ船体鳥ぐもり鬼やらひ祖母より享けし豆の数長生きの家系と言はれ福寿草泣き砂を小瓶に仕舞ふ春の暮仏壇のほとけくすぐり煤払ふ盗られさうな羅漢がひとつ山眠る寒明や紺一色に海晴れてスマホより飛び出す孫の御慶かな釣り人と並びて亀の鳴くを待つかげろひて脱線しさうな電車くる春の雨路地の奥なる純喫茶花ミモザ海へ向かひて異人館斜陽館広きに二人春寒し風光る麒麟の首の伸びんとす囀や潤みて見えぬ空の果連日のはやりやまひや覆れる海辺まで続く砂山春の星金箔を神酒にしずめて春立てり

太田眞佐子 清水 雅子 和田 幸久 國井 泉車 松野登志江 加納 碩恵 荻原八重子 曲直瀬弘子 鈴木ミヨコ 藤塚 且子 小木曾恵子 伊藤 明美 伊藤ふみ子 蔦田多佳子 石井 雅之 上野徳次郎 石樽みさ子 高橋 喬子 樋口満智子 高木 純子 青木 恵子 山下美夜子 渡辺 靖子 小須田知代 小林 裕子 山本恵津子

☆ 寺田 好子 選

石鱈は昭和の香り春の星鮎釣つて返して春の一日かな
 竹百幹鳴る春愁の風の中犬鷺の舞ふ宙といふ檻のなかな翼なき身をひるがへし梯子乗り亀鳴くや家督におもき蔵ひとつ装蹄のととのふ駿馬風光る白椿咲きつくすとは錆びること寒早終末時計あと一分孵卵器の小さな双手風光る振袖をたすきに預け弓始桜鯛尾鰭へさはに化粧塩石窯の廢れて久し斑雪山春の雪更地となりし花街あと舵切つて揺らぐ船体鳥ぐもり百獣の声なく嘆く涅槃絵図
 【二重投句のため一句削除】
 【類句があるため一句削除】
 藁苞のわらに日の棲む寒牡丹春昼のゆつくり落ちる砂時計扇状に町の広ごる初燕堰を落つ水音に倦まず猫柳揚雲雀焦土見し日のはるかなり花ミモザ海へ向かひて異人館室咲や古民家カフェの予約席風車まはる誰かがゐるやうに炉開や古鼠志野に土の声城も鶉も眠らせ美濃に雪積る

森 瑞穂 大野 公子 木村 品子 山田多賀男 長田美智子 佐藤すみ子 田中 紫香 左高 富美 野村かおり 白木窓格子 丸山 洋子 曲直瀬弘子 堀口千恵子 長屋 和子 鈴木ミヨコ 村田 通夫 保浦小枝子 小池 久子 藍川 陽子 樋口満智子 松川 正樹 高木 純子 菱田 菱庵 中島 瑞枝 津田公仁枝 度会さち子

各選者入選句(ゴチック特選)

☆ 富田 澄江 選

行く春の伎芸天女は雲にのり
地の蔵にワイン眠らせ山眠る
放牧の馬の嘶き山笑ふ
全灯を点して山の驛籠
亀鳴くや家督におもき蔵ひとつ
【類句があるため一句削除】
パン生地をこの子と言ひて冬ぬくし
花嫁の銀の打掛花菜風
初買に二つふくらむ紙袋
百歳にあとひと息や小米花
春立つや自転車の子らましぐらに
煤逃げの集まってをる床屋かな
鮒釣つて返して春の一日かな
【類句があるため一句削除】
次の間に眠る赤子や雛飾る
満願の太鼓響くや魚は氷に
寒明や紺一色に海晴れて
歛の背も腹も自在や畦を塗る
やはらかに背中うごきぬ若菜摘
満作や豆腐屋待ちし日のありぬ
立春の水の明るきあふみかな
花ミモザ海へ向かひて異人館
菜の花や風にかたぶく川堤
探梅や傾ぎしままの標石
病床の友の便りや柳鮓
風邪の子と約束事のまたひとつ
トルソーに春の灯点る出窓かな
母の髪梳くひとときや春日差

牧 海南美
小寺佳津女
山田美喜子
後藤 政子
佐藤すみ子
永田 良子
服部美智代
久保田紘義
加納 輝美
高木美智子
早野 仁策
大野 公子
佐藤美喜子
川上久美子
石井 雅之
梅枝あゆみ
島津 忠弘
船渡 文
長 昌子
高木 純子
箕浦 久子
福井 登基
市川 貴久
木透 品子
名和よちゑ
各務 恵紅

☆ 長野美代子 選

枝打ちの音の木霊や命綱
慟哭の鶴の一声空を裂く
春芝居子役はひよいと担がれて
散るといふ美しきこと花筏
ためらひてやがて離るる流し雛
翼なき身をひるがへし梯子乗り
マスクしてみな同じ顔始発駅
灰となるまで見届けて札納
雪吊りや松ををさめし百の縄
与太者のやうに先ゆく畦火かな
白椿咲きつくすとは錆びること
スパイクの春泥まみれ蹴る走る
ひととせをまるめて捨てて古暦
春立つやニンマリ笑ふ鬼瓦
夜半の春夢から覚めぬうす臉
鮒釣つて返して春の一日かな
百獣の声なく嘆く涅槃絵図
放水銃向けて抗ふ鬼浅蜷
凍戻る火炎に軋む自在鉤
足跡のはなびらめきて春渚
彫りてまだ仏とならず春の昼
生まるとは殻を割ること百千鳥
蜆選る叩きつけては広げては
放鷹の鈴しづけさのくびれかな
隙間風真つ直ぐ立ちぬ猫の耳
楽園となる禁漁区浮寝鳥
風車まはる誰かがゐるやうに
城も鵜も眠らせ美濃に雪積る

臼井 秀子
武山 瑠子
武藤 勇
柴田 恭雨
柴田 恭雨
長田 美智子
大西 誠一
大岩 里子
安田 一義
小林 研
左高 富美
早崎 弥子
毛利 慶子
田中 淳子
二宮 けい
大野 通夫
村田 裕乃
岡崎 雅章
高田 雅章
水上 雅章
藍川 陽子
梅本 尚孝
中川 又ヨ
一柳 輝彦
服部 瑞華
菱田 瑞庵
中島 瑞枝
度会 さち子

各選者入選句（ゴチック特選）

☆ 岬 雪夫 選

仕舞風呂家族の数の柚子浮かび
時雨虹木曾三川をまたぎけり
寒紅を引きて気合ひを入れにけり
親離れしてゆくこども春の星
マスクしてみな同じ顔始発駅
やはらかき雨の夕べや土筆煮る
本堂の小暗きところ涅槃絵図
水脈消ゆるところ番のかいつぶり
勝ち駒に変はる一手や春障子
長生きの家系と言はれ福寿草
落葉踏む山のいのちの音のして
次の間に眠る赤子や雛飾る
消えさうで消えぬ冬虹城跨ぐ
室咲きの一鉢置かる救護室
読初や子規全集の赤表紙
校門に白息どつと駆け込めり
彫りてまだ仏とならず春の昼
ふらここや影の伸びたり縮んだり
霜の夜や虚子逗留の漉き硝子
白障子攻めと守りの石を打つ
をさな兒の手にもえくぼやくらんぼ
蛭選る叩きつけては広げては
縫初や母の遺せし象牙篋
菜飯茶屋確か見晴亭と言ひ
草萌に歩幅大きくなりにけり
竹百幹鳴る春愁の風の中
空白へ何か探してしゃぼん玉
摘みてこそ摘まれてこそつくしんぼ

杉山 千歳
竹原のぼる
川上 元子
西田 拓郎
大西 誠一
塚本富士子
西田 和美
村瀬 幹枝
早崎美弥子
小本曾恵子
奥田 宇滴
佐藤美喜子
岡 八重子
石橋 三紀
川瀬 征子
鳥沢 尚子
藍川 陽子
塚本 睦
齋田 礼子
中島 正紘
山田美喜子
中川キヌヨ
岩井 邦枝
河村 春陽
上野みどり
木村 品子
一柳 輝彦
白井美恵子

☆ 森崎 義道 選

竿三段背のびしながら大根干す
樫や蔵に三代古書を読む
海苔粗朶や光の浪を宿しけり
ためらひてやがて離るる流し雛
信楽の壺に梅の香溢れしむ
訛み声を飛ばし商ふ年の暮
雑納め箱に昭和と筆の文字
亀鳴くや家督におもき蔵ひとつ
米倉の大きな施錠梅真白
春一番噂を乗せてフォルテシモ
編みかけの毛糸解かず三回忌
暖かやどこか以ている従兄弟会
母の杖歩幅に合はせ梅日和
長生きの家系と言はれ福寿草
寒卵いだきて母を訪ひにけり
落葉踏む山のいのちの音のして
梅日和青春たどる出会橋
篋の風の戦ぎや冴返る
藁苞のわらに日の棲む寒牡丹
読初や子規全集の赤表紙
小綬鶏に誘ひ込まるる万歩計
【規定違反のため一句削除】
菜の霜をふれば粒子の耀ひに
満作や豆腐屋待ちし日のありぬ
堰を落つ水音に倦まず猫柳
生きのびし千体雛のほつれ髪
春昼の城下を統ぶる時の鐘
室咲や古民家カフェの予約席

横井 美圭
近藤 康男
橋本 恭雨
柴田 恭雨
古川美香子
西尾桃太郎
横井たつ子
佐藤すみ子
多和田瑠璃
成瀬 智子
左高 富美
高橋よし子
傍島 豊子
小木曾恵子
竹原のぼる
奥田 宇滴
白井志げ子
古田 徹生
保浦小枝子
川瀬 征子
三尾 博子
土川 照恵
船渡 文
樋口満智子
宮本ます美
武田 巨子
菱田 菱庵

各 選 者 入 選 句 (ゴチック特選)

☆ 矢田 邦子 選

【類句があるため一句削除】
 みどり児のぬくとき尿も淑気かな
 能管の高音乗せくる桜東風
 初弘法土手の蓬の摘み頃に
 放物線描くシュートや冬青空
 やはらかき雨の夕べや土筆煮る
 冬の鶯音なく回る賤ヶ岳
 解体の跡のぬかるみ凍返る
 編みかけの毛糸解かず三回忌
 冬蜂の猫につつかれ歩きけり
 寒月や明かり乏しき神楽坂
 春の雪更地となりし花街あと
 鮎釣つて返して春の一日かな
 渡し待つ岸辺の風や猫柳
 消えさうで消えぬ冬虹城跨ぐ
 鶏小屋に偽卵ころりと寒日和
 寒念仏越後の闇を押しゆける
 春芝居子役はひよいと担がれて
 扇状に町の広ごる初燕
 冬枯れの空宿り木の頭なる
 剪定の脚立の上で空褒める
 冬桜薄日に色をなくしけり
 初音かな桔梗塚訪ふ道すがら
 蛭選る叩きつけては広げては
 春泥や大鉄骨が組まれゆく
 隙間風真つ直ぐ立ちぬ猫の耳
 公園は老人ばかり糞ぐもり
 風邪の子と約束事のまたひとつ

番匠 洋子
 武田 巨子
 高山 信子
 松田 妙子
 塚本富士子
 久保田絃義
 左高 富美
 左高 富美
 はやし碧
 安田 邦男
 長屋 和子
 大野 公子
 佐野 君江
 岡野 八重子
 松浦なつ子
 岡野 八重子
 武藤 勇
 藍川 陽子
 山田 正子
 原 百合子
 堀江 美州
 森島 紘子
 中川キヌ子
 清水須磨子
 服部 瑞華
 清水 雅子
 木透 品子

☆ 横田 義男 選

仕舞風呂家族の数の柚子浮かび
 連風の空存分に泳ぎけり
 霜柱大地一寸立ち上がる
 犬鷺の舞ふ宙といふ檻のなか
 マスクしてみな同じ顔始発駅
 いつの間に知らぬどうしの焚火の輪
 紅顔も髭面となり卒業す
 灰となるまで見届けて札納
 雪吊りや松ををさめし百の縄
 豆撒きの拾えるまめの数となり
 糸電話糸のたるんで目借時
 出窓から空を仰ぎてヒヤシンス
 青き踏む身の錆少しづつ落とし
 仏壇のほとけくすぐり煤払ふ
 土に坐し土笛を売る涅槃の日
 寒念仏越後の闇を押しゆける
 校门に白息どつと駆け込めり
 酒蔵の隅に安らぐ古雛
 自転車のドミノ倒しや北風
 をさな児の手にもえくぼやさくらんぼ
 ルージュ引くときめき奪ふマスクかな
 青ぬたや平凡な日の句読点
 大寒に郡上本染晒しけり
 めでたさも入れし袂や初鏡
 摘みてこそ摘まれてこそつくしんぼ
 室咲や古民家カフエの予約席
 闇深くなる恋猫の息づかひ
 マンションの二重のロック山笑ふ

杉山 千歳
 宇佐美 昭子
 三尾 博子
 山田多賀男
 大西 誠一
 佐藤すみ子
 伊藤 英司
 大岩 里子
 安田 一義
 田中 良子
 酒向えみ子
 若尾 和子
 飯田 正幸
 伊藤ふみ子
 遠藤 正恵
 蔭田多佳子
 鳥沢 尚子
 斎田 礼子
 向畑あさひ
 山田美喜子
 古里まどか
 長尾美千子
 鈴木 将之
 木村 品子
 白井美恵子
 菱田 菱庵
 納土 茂子
 小林 裕子

第十九回芭蕉の道俳句大会選者一覧

応募句選者

井越	芳子	今津	大天	大野	鶴士
荻原	正三	小鳥	幸男	寺田	好子
富田	澄江	長野美代子	岬	雪夫	
森崎	義道	矢田	邦子	横田	義男

(敬称略・支部選者アイウエオ順)

俳人協会岐阜県支部

「芭蕉の道俳句大会」選考内規

☆特選(三点)、入選(一点)にて、各選者の選の得点を集計して賞を決定する。

一、合計点が多い句から賞を決定。

二、(一)で決しない時は、特選の多い句を上位とする。

三、(二)で決しない時は、講師特選のある句を上位とする。

四、(三)で決しない時は、講師入選のある句を上位とする。

五、(四)で決しない時は、投句順の早い句を上位とする。

六、同一作者に入選句が複数ある場合は、上位の句のみ入選とする。

☆応募句入賞句は、本人句確認をする。

☆二重投句、類句、類想句は入賞決定後であつても入賞を取り消す。

応募句投句者数 四五〇名、総句数 一〇〇〇句